

引き裂かれた〈顔〉の記憶：林京子『道』 (1976年)における死者の現れ

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

57

(号 / Number)

1・2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

2010-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021104>

引き裂かれた〈顔〉の記憶

——林京子『道』（1976年）における死者の現れ——

鈴木 智 之

かろうじて始まったところで、死はすでに終わっている。

(V.ジャンケレヴィッチ『死』)

過去を歴史的に関連づけることは、それを「もともとあったとおりに」認識することではない。危機の瞬間にひらめくような回想を捉えることである。(W.ベンヤミン『歴史哲学テーゼ』)

1. 死者に出会うということ／死を書くということ

人は、今まさに死んでいこうとする人に“出会う”ことができるだろうか。例えば、“死に目にあう”ということが、しばしば規範的な看取りの形として語られたりもするのであるが、はたして死にゆこうとする人に“会う”ことは可能なのだろうか。それとも、“死に目にあう”の“あう”は“遭う”と書くべきであって、もとより“会う”ことなど想定されていないのだろうか。

V.ジャンケレヴィッチが論じているように、死は、経験の位相においてとらえようとするならば、未来形において“〇〇は死のうとしている”と語られるか、さもなければ過去形において“〇〇は死んでしまった”と語られるしかなく、今まさに死にゆこうとする時を語る“現在形”の表現を拒絶するものなのかもしれない。他者の死に立ち会うということ——「死なれる」ということ（鷲田清一）——は、その人が“まだ生きている”状態から“もう死んでしまった”状態への移行として経験される。この時、その中間にある死の瞬間は誰によっても体験されることのない、いわば不在の通過点として私たちの把握をすりぬけていくことになる。

だが、そうであるとすれば、誰が死の証言に立つことができるのだろうか。証言者の資格が、語られるべき現実に立ち会ったという事実に根拠づけられているとするならば、その役割を担おうとする者は、にもかかわらずそれを経験としては語りえないという事実に直面することになる。その時、人はどのようにして他者の死を想起し、そこにいかなる言葉を見いだすことができるのか。そして、その証言に耳を傾け、記憶を語り継ぐという営みは、どのような意味で経験を継承していることになるのだろうか。

死という経験のこうした根源的な他者性は、その出来事の語りを倫理的な呼応において引き受けようとする者にとっては、ますます尖鋭なジレンマとなって現れてくる。私は死者の声に答えて語

り始めなければならない。その呼びかけは私に、何らかの道徳的または政治的な態度の取得を求め
る。しかし、道徳的物語や政治的言説はその経験を決して包摂しきれないということが、あらかじ
め、どこかで感じ取られている。そこから、私はどのような言葉を発することができるのだろうか。

死あるいは死別という出来事をめぐるとの問いを念頭に置いて、私たちはここで、一篇の小説を
読み進めてみようと思う。とりあげるのは、林京子の短編『道』（『文学界』1976年6月号初出）
である。

林京子の文学的な営みを、この厄介な問いかけに対する応答の試みとして受け取ることは、おそ
らく大きく的を外した企てにはならないだろう。実際のところ、長崎における被爆の体験を起点に、
「八月九日の語り部¹⁾」として、書くという行為へと向かった林は、必然的に死を綴り続ける作家
とならざるをえなかった。林はその日にも、またその後にも、おびただしい数の死者に出会い、死
を見てきた。そして、作家自らが明晰に意識しているように、だからこそ彼女は書くのであり、書
くということは「死の側に自分を置く」ということに他ならない。

物を書いているとき、私は、死の側に自分を置いて書いている。これは、はっきりと意識的である。向
きあう、文字のない原稿用紙は、まぶしいほどの生である。私は、生に向かって死を書いている。生を
書いて、死を書いている。考えたり判断したりする思考の基盤に、正と負があるとすれば、私は死、即
ち負を常態として物事を考えている。(7-377)

死を常態として思考し、生に向かって死を書くこと。それが、林にとって、自らの戦後の生を支
える術であった。死者たちの死んでいった姿を描くことが、自分自身の生命を照らし出す作業とな
った。例えば、八月九日に同じ長崎の工場に動員されていた同年代の「少女たち」を思い起こしな
がら、彼女は次のように記している。

十四歳で死んだ少女たちの顔を焼け跡から掘りおこし、その中に自分の生命を置くことによって、私は
命の貴重さを知り、死亡した友だちの生命への愛しさも知らされた。彼女たちの死による不幸で、私た
ち被爆者の生命は鮮明に描き出されている。(7-342)

ここに語られた、死んだ者たちの「顔」を掘りおこし、その中に「自分の生命を置く」というこ
とが、すなわち“書く”ということである。その営みは、死んでいった者たちとともにあり、死ん
でいった者たちのために書くという意味において、強い倫理性を帯びている。死んでいった人々が
いかに死んでいったのかを語らなければ、その人が生きていたという事実までもが曖昧なものにな
ってしまう。だから、「死」をうやむやのままに放置することなく、正確にその出来事を語らなけ
ればならない。それが、その人の存在に「証をたてる」ことであり、ひいては「被爆者」として生
き残った「自分の生命を確かめる」ことでもある。

(…) 死んでしまった彼女たちにとって、八月九日は、どんな意味を持っているのだろうか。彼女たちの中には、骨さえ残さずに被爆死した者がいる。死の様子は知りようもなく、死を曖昧なままに放置していると、彼女たちの生きていた事実までが、曖昧なものになってしまう。生きていた一人の人間の生命が、時代の底に葬られていいはずがない。彼女たちは一生懸命に、あの時代に生きていたのである。私は、彼女たちが生きていた証をたててあげたい。(7-342)

だが、「死んだ少女たちの顔を焼け跡から掘りおこす」ことは、いかにしてなされるのか。それぞれに「顔」をもった存在がその「死」をいかに生きたのかを、生きて残された者はどのように書き記すことができるのだろうか。

直接に死の現場を見ても、あるいは死者（死体）を目の当たりにしても、それはまだ出来事としての死を語り得ることを保証しない。とりわけそれが、一人の人間が生きていたことの証として請われるのであれば、死はその現実を生きる者の“経験”として語られねばならないだろう。

林はもちろん、「八月九日」を経験した当事者として被爆の現実を語るができる。それでも、死者はなお<他者>の相貌をもって彼女の前に現れるはずだ。その障壁を彼女の言葉はどのように超えようとするのか。一篇の小説に沿ってこれを検討すること。以下の論考の目的はこの一点に尽きている。

2. 最期の姿を求めて－『道』（1976年）

『道』という作品に語られているのは、作者に重ね合わせてみるができる語り手（「私」）が、その前年（1975年＝昭和50年）の暮れに、長崎を訪れた時のエピソードである。まずは、テキストに沿って、その行程をたどり直してみよう。

「私」が長崎を再訪するきっかけは、「原子爆弾で死亡したN先生とT先生の墓が長崎市内にある、と同級生のきぬ子が手紙をくれた」ことにあった。「きぬ子」と一緒にその墓に参るとともに、二人の先生の「死亡前後の事情を詳しく知っているらしい」「田中先生」に会って話を聞くこと。それが旅の目的であった。

一九四五年八月、「N高女」の三年生であった「私」は、「大橋にあった」三菱兵器工場に動員されて働いていた。兵器工場は、爆心地から1.4キロの距離にある。「N先生とT先生」は「私たちN高女三年生、約三百名の学徒動員について、昭和二十年五月、三菱兵器工場に出向した教師である」。生徒たちの監督には、もう一人の「K先生」を加えて、三人の女性教師があたっていた。三人は「年齢もほぼ同年で、二十四、五歳、独身だった」。そして、三人とも被爆して亡くなっている。しかし、その死亡時の様子がはっきりと分かっていない。

三先生の死は疑う余地はなかった。それでいて、死亡の時の様子となると話は曖昧になった。らしい、らしいと噂話ばかりで、「誰が見た」と断言する話一つもない。(3-187)

「できることならば、確実な死の様子を知りたい」と「私」は思い続けてきた。「死を確かめること」が「三先生の生きていた証にもなる」。それが、「師への供養」にもなり、自分自身が「身軽」になって、「あの日から抜け出す」ための手段ともなるからである。

だから、「きぬ子」の手紙に応じて、さっそく「私」は空路長崎に向かう。「私」の乗り込んだ飛行機は、「原子爆弾を投下した」「B29」と同じように、「雲の切れ目」から「光った街」に向かって降下していく。

到着の翌日、「私」はまず母校（現在は校名が変わり、共学の高等学校になっている）へと赴き、N高女の「犠牲者名簿」を見せてもらう。その表紙には、「昭和二十年八月九日、御国に召されし学徒並びに教職員の原子爆弾による犠牲者名簿」と書かれている。死亡した生徒の氏名と死亡月日の一覧のあとに、「教職員の犠牲者」四名の名を記した紙が綴じられている。「T先生」の「死亡月日」は「即死と噂されている」通り、「八月九日」とある。「N先生とK先生の死亡欄」は「空白」。「私」は、「N先生の名前」が自分と同じ「S子」であったことをこの名簿ではじめて知る。

その後、「私」は「田中先生」の家を訪ねる。「田中先生」は「八月九日」前後の記憶をたどり、語り始める。その前日に「腸カタル」で入院していた病院から戻ったばかりであったこと。九日の朝「T先生」が家に訪ねてきたこと。その日、家で眠っていて、「不意に掛け布団をはぎとられた」ように感じて跳ね起きると、家の中の畳がめくれ、ミシンが飛んでいたこと。家の屋根の瓦がすべて吹き飛ばされていたこと。爆風によって窓ガラスやその他のガラス類がすべて砕け散った学校の様子。やがて動員先の工場から担がれるように戻ってきた生徒の一人が、学校に着くなり息を引き取ったこと。その生徒の亡骸を焼いた時のこと。「大橋」の下に避難していたところを発見されて学校に担ぎ込まれた「K先生」のこと。翌日になって学校に戻ってきた「N先生」のこと。その「N先生」が見たであろう「八月九日」の光景。「N先生」の亡くなる間際の姿。アメリカによる死亡者調査のこと、等々。どこまでが「田中先生」の言葉なのか、どこからが「私」の中に喚起されたイメージなのかが時に判然としない形で語りは進んでいく。

そのあと、「九日と十日の新聞」はどこかにあるでしょうかという問いに、「県立図書館に行けば」と「田中先生」が答え、「私」はひとり図書館に向かう。しかし、探している「八月九日、十日の新聞」は図書館にも残されていない。そこにもまた「空白」が広がっている。「八月九日の長崎」を語る言葉は、どの新聞にも見いだすことができない。

さらにその翌日。「私」は、「T先生」と「N先生」の墓参りに行く心づもりで、「きぬ子」と待ちあわせをする。「T先生」の墓は、その実家である「E寺」にある。

「E寺」では、「T先生」の母親も、先代の住職であった兄も、すでに亡くなっている。今は兄の

息子に代が移っているが、その日はこの住職もまた不在で、夫人が応対に出る。住職夫人は、「義父に聞いた話」として、「T先生」は倒れてきた「クレーンのブームの下敷きに」なって「眉間」が割れていたらしいと語る。「死体は見つかったんでしょうか」と「私」が問うと、「そうらしいです。その檜の木の根元で、T先生のお母さんが、義父と二人で焼いたそうですよ」と住職夫人は答える。

「T先生」の遺体を見つけたのは、その母親であったという。母親は、「九日の朝」に、「寺男」を連れて、兵器工場へと娘を探しに出た。原爆の放つ閃光の中に立っていたという証言を生徒の一人から得る。娘は死んだのだと察した母親は、横たわっている死体を、一体ずつ調べて回る。そして、ひどく変質して見分けがつきにくい、「確かに見おぼえのある」「頭の恰好」をした亡骸を発見する。ふくれあがってしまった死体を棺桶に詰め込んで、寺の檜の木の下で焼いたという。「眉間の傷が致命傷で」「即死」らしかったと語られる。

墓参りを済ませた後、「きぬ子」が「私」に語り始める。自分は「T先生」の最期の瞬間を見た。それは倒れてきた「クレーン」による傷ではなかった。原爆の閃光が、「先生」の顔を二つに切り裂いたのだと。

「人を惑わすようなことを言わないで」ほしいと「私」は言う。「T先生」はここで焼かれたのだから。しかし、「きぬ子」は、それは「違う」と答える。

二人は、その日に行くはずであった「N先生」の墓に参ることを止める。自分と同じ「S子」という名前が刻んである墓を見るのは、今日は気が重いと「私」は感じる。

「私」は、「先生」たちの最期の姿について、確実な話にたどり着けない。「田中先生の話も、住職夫人の話も、きぬ子の話もそれぞれが確かな話である。それでいて問い詰めていけば、確かな話は二つに、三つに、わかれる」。正午を告げるサイレンの音を聞きながら、「私」は長崎の街を見つめる。

3. 証言の分裂—企ての破綻

このように『道』は、原爆によって命を落とした三人の先生の最期の姿を求めて「私」が“証言者”たちを訪ねて歩く物語である。

「私」は「先生」が「どんな姿で死んだのか」を知りたいと思っている。「私は、先生の痛みを知りたい。痛みを感じることで、八月九日で跡切れてしまった師との仲を、蘇らせたい」(3-204)。そうしなければ「私の内の三人は死んでくれない」と感じている。

そのために「私」は、三人の語り手（「田中先生」「住職夫人」「きぬ子」）に出会う。それぞれの証言から、「先生」たちの最期について何が分かったのか。これをあらためて確認しておこう。

(1)「田中先生」は、学校に担ぎ込まれてきた「K先生」の様子を語る。「K先生」は即死ではなかった。浦上川に架かる橋の下に避難しているところを発見されて、同僚の教師に背負われてやってきた。しかし、「田中先生」は「K先生」の最期には立ち会っていない。

同じく「田中先生」によれば、「N先生」は翌日（八月十日）の午後、自力で学校に帰ってきた。九日の午前中、県庁での仕事を済ませた「N先生」は「大橋行き」の電車の中で「原爆」の「閃光」を見た。そのあと、生徒たちが動員されていた兵器工場まで歩いて、生徒たちの救助の活動にあたり、翌日学校に戻った。「N先生」が亡くなったのは、被爆から一ヶ月近くたったころであった。「亡くなる二日前」に見舞いに行った、と「田中先生」は回想する。そして「N先生」の遺体を焼いた記憶がある。その煙が「もぐさ色」であったということも。

しかし、「田中先生」の語りには「T先生」の最期の様子は含まれていない。

(2)「E寺」の住職夫人は、「T先生」の最期について、伝聞を語る（彼女自身が直接に見たことではない。それは「義父（T先生の兄）から聞いた話」として語られているが、「T先生」の遺体を発見した直接の体験者は「先生の母親」である。「住職夫人」の語りは肝心の部分で「伝聞の伝聞」という性格を帯びている）。

「母親」は、「T先生」が「ぴかっと光ったとき、光の中に立っとなった」（3-221）というある生徒の証言から、「娘」はすでに死んでいると察して、「職場の近辺」に倒れている亡骸を、「寺男」とともに一体ずつ起こして探し回ったという。そして、「普通の人の倍ほどに腫れあがって」しまった死体の中から、娘のものと思える遺体を発見した。ふくれあがった死体を棺桶に押し込んで、ようやく釘を打ち、「E寺の」「檜の木の根もとで焼いた」。死因については、「クレーンのブームの下敷きになったとかで、眉間が真二つに割れていたらしかですよ」（3-220）、「眉間の傷が致命傷らしかです」（3-223）と語られる。

(3)「きぬ子」は、「T先生」の最期について別様の話を語る。それによれば、死因は「クレーン」が倒れ込んできたことによる傷ではなく、工場の中で、爆風に飛ばされながらも立ち上がった先生の眉間を、「オレンジ色」の光が切り裂いたのである。そして「顔」を二つに割られながら、「T先生」は「なぜ」と問いかける驚きの表情をした、という。

かくして三者の語りは、とりわけ「T先生」の最期について、ひとつの事実に収斂することなく終わる。「田中先生」は「T先生」の死については何も語らず、「住職夫人」は「E寺」に語り継がれた一つの“事実”を伝える。しかし、「きぬ子」が全く相反する“目撃談”を提示することによって、その“事実性”は宙づりにされてしまう。ひとたび疑い始めれば、「母親」の発見した死体が本当に「T先生」であったのかどうかさえ怪しく思えてくるだろう。「死んでいった人々」の最期の姿を探し求める「私」の企ては、確かな結論にたどり着くことができない。そのもくろみの破綻は、原爆による死の現実を、“事実”として語り継ぐ言葉の欠落を示唆しているようにも見える。「九日と十日」の「新聞」がどこにも存在しないというエピソードは、“事実”を共有する公的な言葉の不在、出来事をめぐる言語的な空白を象徴しているようにも思える。

したがって、「私」の旅は完結しない。最後に「私」が「N先生」の墓参りに行くことを止めるところで作品が終わっているのも、その企てが閉ざされていないことを示しているといえるだろうか。語ろうとして語り尽くせない出来事。語りを得ることで記憶に区切りをつけようとしても、物

語の表皮を破って、そのつど新たな傷が蘇ってくる。「九日のガラス片が手のひらに残っていて、うっかり強く叩くと、肉に埋もれたガラス片は、肉の内部で、肉を切るのだ」(3-226)。最後に分裂したまま投げ出されてしまう証言は、「八月九日」の記憶が、とりわけ“死の経験”の語り継ぎという企てにおいて閉ざされることがないということを教えている。

4. 記憶から記憶へ—『道』における語りの重層と移行

しかし、そうであればこそ、「私」は果てしのない語りの反復に呼び込まれていくのもある²⁾。決して決定的な語りにたどり着けないような危うい条件のもとで、証言とその聴取がなされている。それゆえに、いくつもの異なる版で、また異なる様式で、語りは継続されざるをえない。

だが、その過程において、語り手は全く無力なまま立ち尽くしているわけではない。「私」は“証言者”たちの言葉を引きうけながら、「八月九日」について、そこに生じた“出来事”についてすでに何事かを語りえている。では、それはどのようにしてなされえたのだろうか。とりわけ、自らが“直接の目撃者”にはなりえない「三人の先生」の死について、「私」はいかに語る事ができたのか。以下では、『道』という作品における語りの技法に着目しながら、記憶の継承がどのような言葉の配置の上になされているのかを見ていこう。

ここで私たちは、語り手が文体上の創意を通じて自在にその視点を移動させ、他の人物のまなざしに同一化しながら記憶を呼び起こしているということを確認できる。

作品全体を構成する骨格において、『道』は、現在の「私」の視点から語られている。その「私」は、上述のように、証言の聴き手であり、証言者の言葉は他者の発話として提示される。ところが、三人の証人との対話の場面においては、しばしば括弧(「 」)が削られ、他者の発話であることを指示するその他の文言が省略され、見掛け上、“証言者”が直接語り手を代理しているかのように語りは進行していく。これによって、「私」の意識から“証言者”の意識へと連続的な(滑らかな)移行が行われ、“聴き手”と“語り手”の視点が融合していく。少し引用が長くなるが、「田中先生」とのやりとりの冒頭の場面を例にとってみよう。

①田中先生の家は、道路に面した二階家である。木の格子戸の古い家で、玄関は、道より二十センチばかり低くなっている。

(九行略)

②山茶花が一本、白い花をつけて裏庭に咲いている。木のすぐ際から、西陽を受けた人家の屋根が、川に下る坂道にそって、びっしり連なっている。空き地はなくなっていた。

③「あの日、僕は退院したばかりでね、十ちゅう八、九は、僕も空き地で焼かれる運命にありましてね」

④七月上旬から八月八日まで、先生は浦上にある長崎医大付属病院に入院していた。爆心地から約千五百メートルの距離で、同じ地区にあった医科大学は、教職員あわせて八百数十名の死者を出している。

⑤田中先生の病名は腸カタルである。なんでも食いましたから、カタルにもなりますよ、と先生は口の

端で笑った。

- ⑥退院許可が出たのは八日の朝、軍医あがりの老内科医が、先生を医務室に呼んで、待望の家に帰りま
すか、と退院の許可をくれた。
 - ⑦先生はその場で電話を借り、自宅の夫人に夕方迎えに来るように、電話をかけた。
 - ⑧長崎の夏は、暑い。光の中に棘があって、剣山で素肌をさすような暑さである。
 - ⑨病後の体に日中の退院はこたえる。
 - ⑩先生は身の廻りの品を風呂敷に包んで、夕方を待った。夫人が迎えに来たのは、夕方の六時をすぎて
いた。
 - ⑪帰り支度を整えて、ベッドに坐っている先生を見て、気が早い方、と夫人は笑った。そして人力車を
探してきますから、と病室を出て行った。
 - ⑫食糧不足の時代である。街をながして客を探す人力車はないが、病院の庭には常時、三、四人の車夫
が客を待っている。その日に限って、人力車は一台もない。
 - ⑬「仕方ありませんね、電車では無理ですし、あすの朝まで我慢して下さいね」
 - ⑭西山から人力車をつれて迎えに来ます、と夫人は風呂敷包み一つ、胸に抱いて帰っていった。
- (3-194~195)

冒頭の語り(①~②)は、現在時の「私」の視点からみた叙景的な記述である。

これに続いて、その現在時において「私」が聞いた「田中先生」の言葉が、括弧に括られて提示される(③)。

そのあと、「田中先生」が語ったであろう過去の事実を、「私」が整理して伝え、これに歴史的な事実を添える語りへと移行する(④)。

そこに、今度は括弧を外して、しかし「田中先生」の発話であることを明確に指示する一文(「と先生は口の端で笑った」)が挿入される(⑤)。

⑥~⑦は再び、「田中先生」の語りを「私」が編集して伝えているが、その中に「老内科医」の言葉(「待望の家に帰りますか」)が、括弧なしで挿入される。

⑧と⑨で、時制が“現在形”に変わる。⑧は、一般論として「長崎の夏は暑い」ことを語るための現在形であるようにも読める。しかし、それに引きずられるようにして導入される⑨の語りは、その日(八月八日)の「田中先生」の意識に内在する“現在形”の表現である。この一文については「自由間接話法」が用いられているといえる。

ここからの語り(⑩~⑭)は、三人称において語られていくが、どこまでが「田中先生」の言葉の編集であるのか、どこからが“小説的な虚構の語り”であるのかが判然としない。語り手は、あたかもその場面に立ち会ったかのように、ディテイルを語り、その場にいた人の言葉を再現する。結果として、同じように括弧に括られた言葉の提示でありながら、⑬の夫人の言葉は、③の田中先生の言葉とまったく異なる発話上の地位を示している。③は、語り手(「私」)が聞いた、他者の言葉の直接的な再現である。⑬は、その他者の語りの中に現れたまた別の人物の言葉を、おそらくは

「私」が、多分に虚構的な構築（想像力による補完）を加えつつ呼び起こしたものである。その二つの“発話”が一頁のあいだに、全く同じ体裁をもって現れる。それを可能にするだけの語りの体制の移行が、この短い展開の内になされているということである。

あえて図式的に整理をするならば、ここでは、他者の言葉の文法的な処理の仕方に関わる、三つの異なる体制間の移行が見られる。

伝聞を示す直接話法：語り手（「私」）が聞いた他者の言葉は括弧（「 」）に括られて提示される（③）。

伝聞を示す間接話法：他者の言葉は、「〇〇は言った」というような文言を添えて、語りの地の文に組み込まれる（⑤）。

語り手によって編集された小説的語り：他者の言葉は、それが伝聞として聞きとられたものであることを示す記号や文言を付さずに、地の文と連続的な形式において挿入される。ここでは、「私」が小説的な語り手の権限を行使して、他者（証言者）を代理し、他者の視点から語り得るかにように振る舞っている。他者の語りは、三人称の語りに編集されて提示される（⑨～⑭）。

同じような語りの体制間の移動と往復は、「住職夫人」の語りや「きぬ子」の語りの場面でも見ることができる。こうした操作によって、読み手は、いつのまにか、しかし早いテンポで、“現在”の視点から「八月九日」の視点へ、証言の“聴き手”の立場からその“語り手”の立場へと呼び込まれていくのである。

しかし、本稿の文脈において問われなければならないのは、そのような文体上の創意がこの作品において求められているのはなぜか、すなわち、こうした小説的な操作が「八月九日」の語りにおいていかなる方法として機能しているのか、にある。

おそらくそれは、語り手としての「私」が、語られるべき“他者の死”に対して、どのような距離に立とうとしているのか、どのような構えでその経験に向き合おうとしているのかに関わっている。私たちはここで、「私」が「先生の痛みを知りたい」と語っていたことを思い起こさなければならない。「私」が知ろうとしているのは、三人の教師がどのような状況で死んでいったのかに関わる客観的な事実（だけ）ではなく、その死をいかに経験し、そこで何を感じていたのかにある。それは、本稿の冒頭に用いた言葉を反復すれば、「死にゆこうとする人に出会う」こと、あるいはジャンケレヴィッチの言葉を転用すれば、「二人称の死」を語ることではないだろうか。

そのためには、「私」は、“その人の死”に立ち会った“他者”のまなざしに内在しなければならない。歴史を探求する研究者のように、伝聞情報から“事実”を推理するだけでは、決定的に足りないものがある。「私」にとっては、死者に“会う”ことが問われている。いささか強引とも思えるような“証言の領有”を犯しながら、「私」が“他者の視線”の内側にもぐりこみ、そこから「八月九日」の現実を見つめようとするのは、そうした“他者の経験への欲望”が働いているからであるといえるだろう。

その意味では、前節で見たような証言の拡散と事実の不確定性は、ただちに語りの失敗を意味するわけではない。「私」は“死者に出会う”ことができたのか。本当に問われなければならないことは、そこにあるように思える。

5. 顔を奪われた死者たち

そうした認識を踏まえ、やや視点を変えて、この作品を“死者に出会おうとする”物語として読み直してみることにしよう。ここでの読解の鍵は、“語り手たち”（証言者と「私」）の前に、死者がどのような顔を晒しているのかにある。

『道』とは、死者の顔をめぐる作品である、ということができる。それほどここには、“被爆”によって死にゆこうとする人々の顔の描写がたくさん登場する。しかし、その多くは、顔を奪われた死者である。

「八月九日」を生き延びた人々は、息も絶え絶えの姿で帰り着いた者を迎え、あるいは消息の途絶えてしまった者を探しに出かける。しかし、原爆の光と熱を浴びた人はしばしば、もはや誰であるのかも分からないほど、相貌が損なわれている。例えば、「被爆地の工場」から、「N高女」に戻ってきた一人の生徒の姿は、「田中先生」の視線を通して、次のように語られる。

彼女は、「比較的元気」な背の高いもう一人の生徒に「肩を支えられ、引きずられながら歩いてくる」。「田中先生」は思わず駈け出して行って、彼女の体を受け止める。

どうした、と引きずられている少女を、先生は抱きとった。そして息をのんだ。顔がなかった。怪我は火傷によるものらしく、顔は白濁した液を溜めて腫れている。目もない。鼻もない。唇もない、ただ、針で突いたほどの小さな鼻腔が、少女の顔の、少女らしい柔らかさをとどめていた。「何年生か、名前をいいなさい」後を走って来た校長は、落ち着いていた。背が高い少女が、校長先生、と呼びかけた。早よう、みんなを助けにいてあげて下さい。死んでしまう、と言った。顔のない少女も、何事かを訴えようと、顔を校長に向けた。しかし声に出す力がなかった。(3-201)

「少女」は、ようやくたどり着いた学校で、先生の腕に抱かれて息を引き取る。だが彼女は何者として死んでいったのだろうか。“あなたは誰か、名前をいいなさい”という「校長先生」の問いかけに答えは戻ってこない。「顔のない少女」が「顔を向け」て何事かを訴えようとするが、すでにその力もなく、亡くなってしまう。その「目」や「鼻」や「唇」とともに奪い取られているのは、“何者かとして死んでいく”という単純な権利である。そして彼女は、亡骸の引き取り手もなく、学校で、「田中先生」の手によって焼かれることになる。

同じように、「大橋」のたもとに避難しているところを同僚の教師によって見つけれ、その背に負われて学校に帰ってきた「K先生」も、「名前を質さなければ、身元の判断がつかない」(3-205) いほど、その肉体が変形していた。それでも「即死」ではなく、学校に帰って来てからも生

きていたのですねという「私」の問いかけに、「田中先生」はこう答える。

「いや、彼〔同僚の教師：鈴木注〕が九日の夜K先生を背負って学校に帰って来ています。即死ではないなあ、K先生だったなあ、あれは。僕は顔を見たんですよ、でもね、顔のない人間を、いくら眺めても同じでね、相手を認めるっていうことは、顔なんだなあ」(3-205)

「田中先生」は、その人を「K先生だったなあ、あれは」とふりかえる。そこでは、身元の同定はなされている。しかしそれは、相手の顔を見て確かにその人であることを認めるということがもはや困難な状態での判断であったことがうかがえる。「相手を認める」ということ、そこに“その人の”存在を認めるということとは、“その人の顔”の現れに依存している。その当たり前の認知が、もはや可能でないほどに、その体は傷んでいる。「K先生」もまた、「顔のない人間」として死んでいく。

さらには、娘の死体を探し歩く「母親」が見た（と語られる）「T先生」の亡骸の様子。「母親」には身元を特定するためのひとつの手がかりがある。それは「南無阿彌陀仏」と書かれた寺の「のぼり」を下着に縫い直して「T先生」に着せていたことである。「念仏の一部でも焼け残って、肌についているなら、それは娘だ」(3-221)。そう思いながら、「母親」は、「寺男」とともに「職場の近辺」に横たわる死体のあいだを歩き回る。そして、ようやく「娘」のそれと思しき遺体を見いだす。その場面。

寺男が、地に伏した死体を、一つ一つ起こして、顔をのぞき込んでいる。その一、二間先に、両手を広げて、地に伏せて死んでいる遺体がある。死体は、普通の人の倍に腫れあがっている。女のようなだった。

丸太のように転がる死体を眺めているうちに、死体の髪の毛が目に入った。とっさに、母親は立ち上がった。遺体は、娘に似た茶色い細い毛をしていた。血液がにじんで、乾いた部分が黒くみえるが、確かに見おぼえがある、頭の恰好をしている。

生前の娘らしく、細っそりした死体を探していた母親は、自分を取り囲む周辺の異常さを、改めて知った。

母親は、寺男を大声で呼んだ。遺体を、二人で仰向けに起こした。伏せた腹の部分に、のぼりの墨字が残っていた。(3-222)

ここにも「T先生」の顔は現れてこない。死体は、一見するだけでは判別がつかないほどに変形し、脹れ上がっている。「三度も四度も眺めて、通り過ぎた死体らしかったですよ。自分の娘がわからんほど、ひどかったらしかったですよ」(3-222)と「住職夫人」は「私」に伝えている。身元の特定は“髪の毛の色や細さ”，「頭の恰好」，そしてなにより「のぼり」の生地に書かれていた「墨字」を手がかりになされている。この場面で“母親”が目にしたはずの顔については直接言及がなされない。ただ、「クレーンのブームの下敷きに」なって「眉間が真二つに割れていた」ことが

「死因」として語り継がれるばかりである。「T先生」もまた、「顔のない人間」として死んでいったのである。

こうして繰り返し語られている“顔のない死者”たちの姿は、その容貌の異様さとともに、“原爆による死”の異常さ、その“非道さ”を明らかにする。それは、<人間>が一個の<人間>として死んでいくことさえも、奪い取る。その熱と光は、人を、もはや<人間>ではない何かに変形して、死をもたらす。たとえ“最期の瞬間”に立ちあったとしても、“死にゆこうとする誰か”と“看取ろうとする誰か”との相互的（対面的）関係は成り立ちがたい。私たちはそこに、圧倒的なまでに“不正な死（unjust death）”を見ざるをえない。

6. 引き裂かれた<顔>の記憶

だが、そうであればこそ、「きぬ子」が最後に語った「T先生」の「顔」が、私たちの前にひときわ鮮烈なものとして浮かび上がってくることになる。

「私」と二人で墓参を済ませ、「E寺」の石段を下りていく途中に、「きぬ子」は突然、「さっき、光の中で先生ばみた、って話したろうが」と語りかける。そして、「八月九日」の朝に「T先生」が工場でどんな様子であったのが回想され、やがてその話は、被爆の瞬間へとたどり着く。語り手（「私」）の視点はここでも「きぬ子」のそれに同一化し、あたかも自分がその場にいたかのような臨場感をもって、そこに差し込む光が織り成す陰影にいたるまで、鮮明に記述していく。

詰所ときぬ子の職場の中間に、工場の出入り口がある。T先生が、入口に向かって立った。翳りがちだった光が、瞬間、入口を長方形に浮きたたせた。T先生は、目を細めて光を眺めていたが、くるときぬ子の方を振り向いた。そして、にっこり笑って片手をあげた。

用ですか、と職場を離れて行こうとすると、「違う」と首を振って、一言一言、口を大きく開けて、何か言った。機械の音に掻き消されて、T先生が何を言ったか、きぬ子には聞きとれなかった。

その時だった。オレンジ色の、帯状の閃光が地を叩いて、なだれ込んだ。

光は、溶鉱炉の鉄のようにはとばしり、入口に立っているT先生を、弾き飛ばした。(3-225)

そしてこのあとは、先に見た三つの話法が瞬時に入れ替わりながら、したがって、語りの現在時と「八月九日」の視点がめまぐるしく交錯しながら、「きぬ子」の目に映った「T先生」の最期が語られていく。

飛ばされた先生は、すっきり起き上がり、光の中に立っていた。

「うちは見たっさ」ときぬ子が言った。

光の中に立つT先生の眉間を、一きわ光ったオレンジ色の光線が、鉋のように鋭く、切りつけた。

「クレーンじゃなかつさ、光で、先生の顔は二つに割れたっさ」きぬ子は樫の幹を、手のひらで撫でて、

「はっきり、うちは覚えとる、先生の驚きな顔を」と目を伏せた。あの一瞬の表情は即死した人間の表情ではない。なぜ！と問いかける、驚きの表情だった。だから、いまでも誰かに、なぜ、と問いかけながら、何処かで生きている気がする。今日まで墓を訪ねなかったのは、遺体がみつからないまま、死者の仲間に数えられているのではないか。それを聞くのが怖ろしかったのだ、と言った。(3-225)

ここで想起されているのは、顔面を二つに引き裂かれながら、なお「なぜ！」という問いを発する表情である。原爆の閃光は、たちまちのうちに「T先生」を死の側へと連れ去ったに違いない。けれども、あれは「即死した人間の表情ではない」と「きぬ子」は回想する。ほんの一瞬の、けれども一瞬のあいだと呼びうるだけの厚みをもった死の過程にあって、「T先生」は顔を奪われることなく、生き残ろうとする者に向かって“問い”を放っている。そこに浮かび上がるのは、死の瞬間における人間の〈顔〉、あるいは“死にゆこうとする人”という名の“他者”の〈顔〉である。

「きぬ子」はそれを見たがゆえに「T先生」が本当に死んだとは信じられないという。それは、“すでに死んでしまった”という過去形において、この出来事をふりかえることができないということである。彼女の中には、“死にゆこうとする現在”の時だけが刻みつけられている。そして、「私」もまた、「きぬ子」の視点に同一化することを通して、「T先生」の〈顔〉を見てしまったのだといえるだろう。

7. 事実を知るといふこと／死者の顔に出会うといふこと

もちろん「私」は、単純に「きぬ子」の証言が“事実”を告げていると考えているわけではない。先にも述べたように、“語り手”も、そして“読み手”である私たちも、出来事の“事実性”（例えば、「T先生」の死因は何であったのか）に関して、明確な認識を得る地点にたどり着けてはいない。しかし、戦争による、そして原爆による大量死の中で、一人ひとりの人間の最期の様子を“事実”として記述しうるか否かという問いとはいささか位相を異にする形で、「きぬ子」の証言は、被爆死の“経験”を語ろうとしている。

そこには、死にゆく者の〈顔〉が露出している。閃光によって顔を引き裂かれながら、その突然の、圧倒的な暴力に戸惑い、あるいは怒り、あるいはそれを糾弾するかのよう「なぜ」と問いかける〈顔〉。それは、「危機の瞬間に思いがけず現れてくる」「過去の一かぎりのイメージ」（W.ベンヤミン）のように、一瞬のまたたきの中で“すべて”を開示する力を宿している。いつまでも過去を見つめ続ける「私」や「きぬ子」の前に、閃光のように浮かび上がるその顔貌は、「私」たちに向けて問いを発し続ける。その〈顔〉を見てしまった者は、その出来事を“過去”のものとして語り終えることができない。

そう考えてみると、この小説の結末において「私」がたどり着いた状況は、単に複数の“事実”のあいだで引き裂かれているというだけでは足りない。むしろ、その人の“死”を、事実性の語りの内に包摂しようとする姿勢と、その人の〈顔〉に出会い、その人の問いかけに曝されてしまうと

いう事態とのあいだの、埋め尽くしがたい溝に立ち至っているのだというべきである。

生き残った者は、死者の顔を探し求める。しかし、死者の〈顔〉を見た者は、決してその出来事を“過ぎ去った現実”とすることができない。

【注】

- 1) 林京子が自ら「八月九日の語り部」と名乗ったのは、『無きが如き』（1980年）においてである。この「宣言」のもつ意味については、黒古一夫（2007）に論じられている。
- 2) 「T先生」の死についても、幾度か作品を超えて語り直されている。『道』の一年前に発表された『祭りの場』（1975年）においては、「T先生はクレーンにみけんを割られ即死した」（1-43）と明確に記されている。また『やすらかに今はねむりたまえ』（1990年）では、「T先生」は「南先生」という名前で語られる。「引率者の南先生は、八月九日に被爆死した先生である。額にクレーンが当たって、即死だった。遺体は先生の母親と、寺の下働きの男が、工場の焼け跡から連れ帰っている。三日四日経っており、遺体の腹部が膨れあがって、用意した棺の蓋が閉まらなかったという」（5-17～18）と、「住職夫人」の語りそのまま“事実”として反復されている。「先生」の生家である「寺」を訪ねたことには触れられているが、「きぬ子」の語りは一切引用されない。

【テキスト】

林京子の作品はすべて『林京子全集』（全8巻、日本図書センター、2005年）による。

（7-377）は第7巻377頁を指す。

【参考文献】

- Benjamin, Walter 1940 *Geschichtsphilosophische Thesen*. (野村修訳「歴史哲学テーゼ」, 野村修・高原宏平(編)『暴力批判論 ヴァルター・ベンヤミン著作集1』, 晶文社, 1969年)
- Jankélévitch, Vladimir 1966 *La Mort*. (仲澤紀雄訳『死』, みすず書房, 1978年)
- 陣野俊史 2010 「『その後』の戦争文学論⑨」, 『すばる』, 2010年1月号, 集英社
- 黒古一夫 2007 『林京子論 「ナガサキ」・上海・アメリカ』, 日本図書センター
- 鷺田清一 2002 『死なないでいる理由』, 小学館